長谷宗悦の新作について

嶋﨑　吉信（美術評論家）

長谷宗悦の新作は、どこか懐かしさを伴う親近感を見る者に抱かせる。しかしこの物体は、実際には私たちがそれまでに見たことのない姿をしていて、初めて接することの新鮮な緊張感をも同時に喚起する。そうしてこの相反するようなふたつの感覚によって、見ることのたのしみは複雑で豊なものになっている。

懐かしさはおそらく、古い地蔵堂や漁具小屋のようなそのたたずまいに理由があるのかもしれない。解体された家屋などの廃材を収集し、新しい木材は外気にさらしてなじませ、あるものは焼いたりときには塗装を施したりして、部材の姿形や表情を確かめながらそれぞれに持ち場を与え、長谷は全体を構成してゆく。この物体は、木肌の新しい通常の彫刻作品とは異なる落ち着きやおだやかさを全体に漂わせていて、見た目のほころび加減とともに、木の家に住んできた私たちの感覚と自然に同調するのである。

この物体を構成する各部材はさまざまな表情と古色を帯びていて、それらは長谷が作為を持って選び出し、または作り上げたものだが、そうした木の表情やあじわいのひとたび構成された後の発言は、きわめて注意深く抑えられている。これは、古材を用いることの多い長谷の仕事の重要なポイントだと言えるだろう。なぜなら、素材のあじわいに頼る造形は、見る者の感覚の表面を撫でて快楽と錯覚させるだけで、しかもそこに介在する人為を思い出すとき、快楽と感じたものはすぐにざらついた不興に転ずることがしばしばだからだ（これはマチエールに拘泥した絵画にも言えるだろう）。長谷のこの物体のすべての部分は、作者の造形意識によって古色のままに精妙にコントロールされ、全体のために自制し、協調しているのである。

この物体の前にすこしの時間立つと、懐かしさを伴う親近感はそのままに、　これがじつはそれまでに見たことのない構造物でもあることに気づくだろう。

中心から外に向かっておよそ 10 度の斜傾で突き出た多数の板材は、見る者の接近を感覚的に拒むような緊張感をたたえている。さらにこれらの板材は、拒みながらもその懐に視線を誘う奥行きを持っていて、しかもそこにはスピードがある。しかしよく見ると、それらの板材の先端近くにはさまざまな木片が載せられていて、その傾斜とともに、あたかも物体は見る者に手を差し延べているような近しさを示していることにも気づくだろう。突き出た板材の先に看板のように垂直に吊り下げられた部材も、尖端が蝟集する緊張感を和らげて、どことなくユーモラスである。全体に見られる相反するようなふたつの感覚はこうした細部でも両立していて、見る者を惑乱してもてなす。

このような複雑で稠密な造形的もてなしを受けながらその周囲を移動すると、物

体は突然べつの姿を現して見る者をおどろかせる。先きほどからの板材は側面を見せて鋭利な線状になり、そこには向こう側まで見通せる空間が出現し、物体は魚の骨状（または杉綾状）となるのである。この姿においても、鋭い線となって両側に突き出た骨の緊張感と、その間隙の空間の緩和作用が拮抗しながら両立していると言えるだろう。

物質社会の落穂拾いのような廃材の収集に始まる長谷の仕事は、それらの構成によって生み出される物体のよくコントロールされた姿と、ひとたび視線を得て活性化するその豊かな機能とによって、見る者の意識に具体的に働きかけるのである。